■原著論文

要介護者が暮らす住環境を理解することを目指した住居の見取り図作成による学習効果の検討

井上葉子*　西村和子**　松村あゆみ***

Study of the learning outcomes of creating floor plans for care patients' homes in order to understand their living environments

Yohko INOUE*　Kazuko NISHIMURA**　Ayumi MATSUMURA****

*奈良学園大学 保健医療学部（〒631-8523 奈良県奈良市中登美ヶ丘 3 丁目 15-1）
*Department of Health Science, NARAGAKUEN University. (3-15-1, Nakatomigaoka, Nara-shi, Nara, 631-8524, JAPAN)
**田北看護専門学校（〒639-1016 奈良県大和郡山市城南町 3-25）
** TAKITA Nursing School（3-25 Jonancho, Yamatokoriyama-shi, Nara, 639-1016, JAPAN）
***兵庫大学 看護学部（〒675-0195 兵庫県加古川市平岡町新在家 2301）
***Department of Nursing，HYOGO University. (2301 Hiraokacho Shinzaike, Kakogawa, Hyogo, 675-0195, JAPAN)

要旨

本研究では，在宅看護論演習において，療養者の生活という視点を育み，居宅における環境調整の意味と意義を理解することについて，要介護者が暮らす住居の見取り図作成とポスターセッションによる学習効果を検討することを目的とした。A 短期大学 2 年生 115 名の授業後の振り返りの内容分析を行った。その結果，【居住環境の捉え方】，【見取り図作成とポスターセッションによる成果】など 6 つのカテゴリが生成された。授業を通して学生は，生活の場である居住環境とそこで営まれる日常生活動作（ADL）を具体的にイメージし，生活者としての対象を理解する上で効果的であった。さらに，見取り図を用いたポスターセッションでは，双方の意見交換により学習内容を深化させることにつながり，他者に明確に内容を伝えるスキルを考える機会ともなった。

今後はより効果的に学習するための事例設定について検討する必要がある。

キーワード：　看護学生，住環境，見取り図

1. はじめに

我が国の高齢化は，諸外国に例をみないスピードで進行している。厚生労働省では，団塊の世代（約 800 万人）が 75 歳以上となる 2025 年を目途に，高齢者が住み慣れた地域で人生の最後まで過ごし続けることができるよう，高齢者の尊厳の保持と自立生活の支援の目的のもと，地域包括ケアシステムの構築を推進している [1]。また，医療現場では，入院期間の短縮化により，医療の提供の場が病院から在宅へと移行し，在宅看護のニーズがますます高まっている。

近年の医療環境の変化に対応するため，看護師により一層求められる基本的な資質を明確にする方向でカリキュラム改正が行われ，看護の対象者を健康を損ねている者としてのみとらえるだけでなく，疾患や障害を有している生活者として幅広くとらえて考えるという内容が強調されている [2]。ところが，学習者である看護学生は，社会環境の変化，家庭生活の簡便化などにより，生活経験が少ない学生が増え，生活に主体的にかかわり，より良いものにしようという意欲を喚起することが困難になっている現状が示されている [3]。

また，病院勤務の看護職を対象にした在宅を見据えた看護活動の実態調査では，住居環境の把握や社会資源の把握，多職種との連携の実施率が 4 割以下である現状が示され，これらの視点を育成するための教育プログラムの開発の必要性が示されている [4]。

看護基礎教育における在宅看護論の教育内容を検討した研究は，2009 年のカリキュラム改正後からいくつかの調査報告がある。在宅看護論の教授方法についての研究では，対象を生活者として理解するためには，在宅と医療施設との環境の違いを学ぶ必要性が提言されている [5]。学内演習でのグループワークの活用や [6] 学生が主体的になるための共同学習の事例が報告されている [7]。さらに，訪問看護実習において，学生の住環境の整備に関する理解が深まりにくい傾向があるため，講義や演習の中で取り上げる必要がある事が示されている [8]。

以上のことをふまえ本研究では，架空の家族設定による

要介護者が暮らす住居の見取り図作成とポスターセッションを用いた授業実践による学習効果を検討することを目的とした。

なお，本研究では見取り図を，先行研究にならい「住まい方についての情報が住宅平面図に記載されたスケッチ」と定義した。

2. 方法

2.1　見取り図を用いた授業の概要

授業実践は，2014 年 10 月～2015 年 1 月に在宅看護論演習 45 時間の中の 12 時間を用いて行った。授業では，福祉用具の展示施設の見学（4 時間）を行った後，要介護者が暮らす住居の見取り図作成を，5～6 人のグループに分かれて行った（6 時間）。そして，学びの共有の時間として，作成した見取り図（図 1）を用いたポスターセッションを行った（2 時間）。また，授業終了後に，用紙を配付し授業での学びと感想についての記入を求めた。

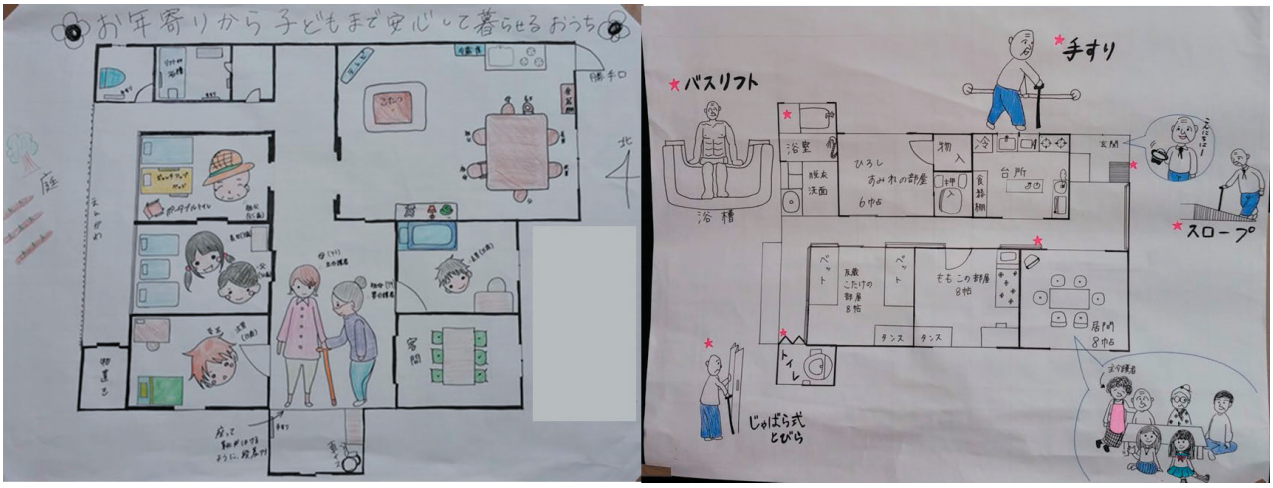

図 1　見取り図の一例

2.2　調査対象者

A 短期大学 2 年生 122 名のうち研究参加の同意が得られた学生とした。

2.3　分析方法

分析方法は，質的記述的分析方法[9]とした。文脈単位は，学生の授業の学びに関する記述内容全体とし，記録単位は，「学生は，要介護者が暮らす住居の見取り図の作成の演習を通してどのような学びを得たのか」という研究のための問いに対する答えを一つ含むセンテンスとした。個々の記録単位の意味内容の類似点と相違点を検討し，〈ポスターの工夫による学習への影響〉など 30 のサブカテゴリを生成した。次に，サブカテゴリ同士の類似点と相違点を検討し，6 つのカテゴリにまとめた。データの解釈および分析の妥当性を 3 名の共同研究者間で確認した。

2.4　倫理的配慮

本研究は奈良県看護教員研究会倫理審査委員会の承認（承認番号 29-1）を得たうえで実施した。用紙は無記名とし，記載内容を研究に使用すること，個人が特定されないようデータ処理を行うことを対象者に書面と口頭で説明した。研究参加の可否は成績などに影響しないことを伝え，用紙回収時，参加したくない場合は提出しなくても良い旨を伝え，用紙の提出をもって同意とみなした。集計は授業実施者ではない研究者が集計し個人が特定されないよう配慮し，集計されたデータは研究者のみが扱うこととした。

3. 結果

用紙の回収は 115 枚（回収率 94.3%）であった。見取り図を用いた授業での学生の学びとして 421 記録単位を抽出し，30 のサブカテゴリにまとめ，最終的に 6 カテゴリを抽出した（表 1）。以下，カテゴリを【　】，サブカテゴリを〈　〉で示し説明する。

表 1　演習における学生の学び

カテゴリ	サブカテゴリ	記録単位数
1 見取り図作成とポスターセッションによる成果 151(35.9%)	1 ポスターの工夫による学習への影響	50 (11.9 %)
	2 グループ毎の提案内容の共有	45 (10.7 %)
	3 見取り図の相違点の理解	43 (10.2 %)
	4 想像力の喚起	12 (2.9 %)
	5 具体的に考えることができる	1 (0.2 %)
2 居住環境の捉え方 121(28.7%)	6 ADLに合わせた工夫	35 (8.3 %)
	7 福祉用具の活用	35 (8.3 %)
	8 バリアフリー	15 (3.6 %)
	9 快適さ	10 (2.4 %)
	10 経済的負担	8 (1.9 %)
	11 家屋構造の特徴	5 (1.2 %)
	12 安心・安全のための工夫	4 (1.0 %)
	13 危険防止のための工夫	4 (1.0 %)
	14 利便性のための工夫	3 (0.7 %)
	15 QOLの維持向上のための工夫	1 (0.2 %)
	16 人間にとっての家の重要性	1 (0.2 %)
3 学習活動による影響 83(19.7%)	17 学習活動の楽しさ	35 (8.3 %)
	18 グループワークの効果	24 (5.7 %)
	19 興味関心の高まり	8 (1.9 %)
	20 学習の達成感	6 (1.4 %)
	21 学習内容の不足点の気付き	4 (1.0 %)
	22 より深い学びへの気付き	4 (1.0 %)
	23 今後の学習への意欲	2 (0.5 %)
4 家族構成・家族関係・家族役割への配慮 38(9.0%)	24 介護負担を考えた工夫	15 (3.6 %)
	25 家族構成による違い	13 (3.1 %)
	26 家族関係による違い	10 (2.4 %)
5 看護としての活用 16(3.8%)	27 看護への活用の意欲	12 (2.9 %)
	28 看護の役割	4 (1.0 %)
6 自己の生活への応用 12(2.9%)	29 将来の生活への応用	10 (2.4 %)
	30 自分の生活との関連	2 (0.5 %)
記録単位総数		421 (100 %)

【見取り図の作成とポスターセッションによる成果】

このカテゴリは，〈ポスターの工夫による学習への影響〉，〈グループ毎の提案内容の共有〉〈見取り図の相違点の理解〉などのサブカテゴリで構成された。これらは，作成した見取り図を学生間で共有するために行ったポスターセッションによって，見取り図の相違点や視覚的効果について考える機会となったことを表していた。

【居住環境の捉え方】

このカテゴリは，〈ADL に合わせた工夫〉，〈福祉用具の活用〉，〈バリアフリー〉，〈快適さ〉，〈経済的負担〉などのサブカテゴリで構成された。これらは，要介護者の暮らす居住環境を考える際には，バリアフリーの考え方や ADL の状態に合わせて福祉用具を活用すること，快適さや経済的負担をも考慮することの大切さを学んだことを表していた。

【学習活動による影響】

このカテゴリは，〈学習活動の楽しさ〉，〈グループワークの効果〉，〈興味関心の高まり〉などのサブカテゴリで構成された。これらは，グループワークを通して，互いの考えの相違に気づき，互いの考えを理解することにより，興味関心が高まり，楽しく学習活動に取り組めたことを表していた。

【家族構成・家族関係・家族役割への配慮】

このカテゴリは，〈介護負担を考えた工夫〉，〈家族構成による違い〉，〈家族関係による違い〉などのサブカテゴリで構成された。これらは，家族内に要介護者がいる場合，家族構成や家族内での役割や関係性，発達段階の違いによって，住まい方や介護者の負担も変わってくることを学んだことを表していた。

【看護としての活用】

このカテゴリは，〈看護への活用の意欲〉，〈看護の役割〉などのサブカテゴリで構成された。これらは，疾病や障害を抱える療養者や家族の在宅生活を支援する上で，環境調整することも看護の役割であることを学び，さらに将来の看護実践に活用していきたいという意欲が芽生えたことを表していた。

【自己の生活への応用】

このカテゴリは，〈将来の生活への応用〉などのサブカテゴリで構成された。これらは，この演習を通しての学びが，自身の将来に起こり得るかもしれない介護の問題へと応用できるものだという認識をもつ機会となったことを表していた。

4. 考察

グループワークでの見取り図作成と見取り図を用いたポスターセッションにより，学生の生活者としての視点を育み，主体的に住環境を理解することへの学習効果を考察する。

4.1. 見取り図を用いた学習による効果

学生は，バリアフリーを取り入れている家の見取り図が多いこと，家族構成に合わせた家，要介護者を中心とした家，段差が少ない家などそれぞれの家族設定によるグループの考え方や発表内容の違いに面白さを感じていた。 また，見取り図の部屋の配置から家族内の人間関係を想像し，平屋建の見取り図から裕福な家であるといった，経済的な観点でも見取り図を読み取ることも見られていた。工藤ら[10]によると，事例検討をする上で，見取り図という視覚媒体を用いることにより，生活の場の全体像やそこで行われる日常生活動作（ADL）と居住環境の関係が，短時間で情報共有されること，さらに参加者が対象者の生活をイメージすることを喚起し，当事者の存在を身近に感じ，参加者同士の議論を活発化させる効果がある事を示している。在宅療養生活に大きく影響する住居環境で，居室の広さや位置，廊下，トイレや浴室等は見取り図があれば視覚的に，正確に把握でき，家具の位置やベッドの位置，動線なども見取り図をもとに説明することが可能となる。そして，そのように事例を身近に感じながら具体的に対象の生活をイメージし，グループワークを進めたことにより，学生は面白さを感じ，意欲的に課題に取り組むことができたと言える。また，工藤ら[10]は，地域包括ケアシステムの構築を進める上で，多職種協働のための地域ケア会議では，見取り図の活用が非常に有効であることを示している。これらのことから，今回の授業実践において，見取り図の作成とポスターセッションを行ったことは，看護の専門的知識と技術に関する学びを深めるだけでなく，居宅における環境面での視野を広げ，学生の学習をより能動的なものに促進する上での一定の効果があったと言えよう。

4.2. グループワークによる効果

横堀ら[11]は，グループワークと学習内容の発表を用いた在宅看護論の事例検討の演習において，学生はグループ間での異なる考え方にも気づき，さらに発表によって広い観点を持つことができ，療養者・家族・環境を多角的にアセスメントする視点を習得するという学習効果があった事を示している。今回の授業実践でも，グループワークの過程で，自分と違う意見・考え方に気づき，各々の生活の捉え方の視野を広げて理解を深めることにつながっており，このことは，主体的に問題解決できる能力やケアを創造する力，そして多職種と情報共有し協働する力を養う上で一定の効果があったと言える。

4.3. ポスターセッションによる効果

学生は，グループワークを行うことでグループ内での学びを深め，発表によって更に多くの学びを共有でき良かったことを実感していた。発表することによって他の考え方が分かり自分との違いも比べることができていた。奥山ら[12]は，グループワークとプレゼンテーションを導入した教育実践において，学生は他者の発表を聴くことで，発表内容を共有し，他のグループの問題解決方法を自分たちの方法と比較し自らの学びにつなげていることと，個人で学習するよりも，プレゼンテーションの実施に至るまでの過程における他者との相互作用による学習は，深い学びに繋がることを示している。今回の授業実践でのポスターセッションは，学生同士が互いのアイデアや工夫点を共有し，グループ内では気づかなかった問題点や問題解決の糸口を

見出すことで，より良いものへという学生の想像力を喚起する機会としても効果があったと言える。

ただ，今回の授業実践は，単年での結果に過ぎないため，今後も見取り図作成とポスターセッションの活用による学習効果を検討していく必要がある。また，見取り図作成の際に用いる事例についてもどのような事例設定であれば，より効果的な学習につながるのかについての検討が今後の課題である。

5. 結論

在宅看護論演習での，要介護者が暮らす住居の見取り図作成とポスターセッションによる学習効果として，「見取り図を用いて要介護者本人と家族にとっての具体的な居住環境を考える機会となる」，「グループワークを通して各々の生活の捉え方の相違点から多角的な視点を育むことができる」，「ポスターセッションにより学びを共有し，想像力を喚起する機会となる」という効果があることが示唆された。

謝　辞

本研究の主旨を理解し，ご協力いただいた学生の皆様に心よりお礼申し上げます。また，この研究を進めるにあたりご協力いただきました，奥西志穂先生，駒井由美子先生，大谷未来先生にお礼申し上げます。

本研究の一部を第49回日本看護学会学術集会看護教育において発表した。

＜利益相反について＞

本研究における利益相反は存在しない。

（2019.12.24- 投稿，2020.2.6- 受理）

文　　献

1) 厚生労働省．地域包括ケアシステム，
https://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/hukushi_kaigo/kaigo_koureisha/chiiki-houkatsu/
（最終アクセス日：2018年9月7日）

2）厚生労働省医政局看護課．看護基礎教育の技術項目と卒業時の到達度,看護基礎教育の充実に関する検討会報告書, 1-19, 2007.

3）井上葉子，碓田智子．生活経験からみた看護専門学校学生の技術力に関する研究，生活文化研究（51），33-41，2014.

4）近藤 浩子，牛久保 美津子・他．群馬県内病院看護職の在宅を見据えた看護活動に関する実態調査，Ｔｈｅ　ＫＩＴＡＫＡＮＴＯ　Ｍｅｄｉｃａｌ　Ｊｏｕｒｎａｌ 66(1), 31-35, 2016.

5）木部美知子．主体的に看護技術を習得するための学内演習PBL/チュートリアル教育を導入した学内演習,足利短期大学研究紀要24(1), 75-82, 2004.

6) 今西誠子. 自己教育力育成と向上をめざした小児看護技術演習での学生の学びについて,京都市立看護短期大学紀要（35）, 179-184, 2010.

7) 沖野良枝，米田照美・他．急性期成人看護学演習において共同学習法に基づく説明活動が学生に及ぼすストレスと効果, 人間看護学研究(4),63-74, 2006.

8）片山京子，鈴木みちえ．訪問看護実習前後の学生の学びとその変化～ビデオ学習後の感想と実習課題レポートの比較から～聖隷クリストファー大学看護短期大学部紀要（25）51-60,2002.

9）舟島なをみ．質的研究への挑戦, 医学書院, 51-80, 2012

10）工藤恵子, 鈴木晃・他．地域ケア会議を想定した多職種による仮想事例検討会での住まいの見取り図活用効果, 日本公衆衛生雑誌 64(9)，556-566，2017.

11）横堀ひろ, 小笠原映子．看護基礎教育における教授方法の工夫-在宅看護領域における演習科目の授業展開, 群馬パース大学紀要(16)，21-27，2013.

12）奥山真由美, 道繁祐紀恵・他．高齢者の退院支援における看護実践能力育成のためのアクティブ・ラーニングを導入した老年看護学実習の評価，山陽論叢(22)，11-20，2016.

Study of the learning outcomes of creating floor plans for care patients' homes in order to understand their living environments

Yohko INOUE*　Kazuko NISHIMURA**　Ayumi MATSUMURA****

*Department of Health Science, NARAGAKUEN University. (3-15-1, Nakatomigaoka, Nara-shi, Nara, 631-8524, JAPAN)
** TAKITA Nursing School（3-25 Jonancho, Yamatokoriyama-shi, Nara, 639-1016, JAPAN）
***Department of Nursing，HYOGO University. (2301 Hiraokacho Shinzaike, Kakogawa, Hyogo, 675-0195, JAPAN)

Abstract

In this study, as a theoretical exercise in home nursing focusing on the perspective of patients' lifestyles, we examined the learning outcomes of creating floor plans of care patients' homes and presenting these in a poster session in order to understand the meaning and significance of environmental modifications in the home. With a sample of 115 second-year students at A Junior College, we analyzed the students' reflections after the exercise. As a result, we identified six categories, including "Ways of understanding the living environment" and "Effects of creating floor plans and the poster session." Through this exercise, the students were able to form a concrete image of the living environment and activities of daily living (ADL) conducted there, so it was effective for understanding patients as people. The poster session using the floor plans facilitated a two-way exchange of opinions that deepened the learning outcomes and was also an opportunity to think about the skills required to communicate clearly to others. In the future, we need to consider setting up cases to make learning more effective.

Key Word ： Nursing students，Living environment，Floor plan